

# 行動コンサルテーションにおける非言語的相互作用

コンサルタントがコンサルティに及ぼす影響の検討

大石幸二

(立教大学現代心理学部)

KEY WORDS: 行動コンサルテーション コンサルタント 非言語的相互作用

## 目的

Erchul & Martens (2002) は、行動コンサルテーションにおける対人関係の影響力 (social power) について示唆している。すなわち、コンサルタントの行動がコンサルティの信念、態度、あるいは行動に対して影響を及ぼすというものである。この影響力は言語行動ばかりでなく、非言語行動間でも同様に働いていると考えられる (Dinkmeyer, et al., 2016; Montague, et al., 2011)。しかし、学校における行動コンサルテーション研究では、非言語的相互作用に関する実証的研究はほとんど見られない。そこで本研究では、時系列分析 (具体的には、lag-sequential analysis) を用いてコンサルタントがコンサルティに及ぼす影響を検討した。

## 方法

**参加者** 2名のコンサルタント (臨床心理士) と1名のコンサルティ (高校教師) が参加した。コンサルタントは、一方が10年以上 (CTA-1)、他方が10年以下 (CTA-2) の臨床経験を有していた。何れも応用行動分析の基礎教育と技術訓練を受けていた。コンサルティ (CTE) は、15年以上の教職経験を有していた。本研究にクライアントは直接参加せず、コンサルティにはあらかじめ2事例 (了解を得た実在の事例) を想定してもらった。

**期間と場面** 201x年3月と6月に1度ずつ面接を行った。面接時間は約30分であった。ある大学の一室にて、対面着座の設定で実施した。室内にはビデオカメラを2台設置し、1台はコンサルタントを、もう1台はコンサルティを撮影した。

**手続き** 行動コンサルテーションにおいて問題を見極めることを目標とした面接 (problem identification interview) を行った。1度目の面接 (3月) では日中活動の乏しい不登校事例が、2度目の面接 (6月) では親子関係に困難を抱える不登校事例が取り上げられた。

**面接** 面接中、コンサルティはクライアントの行動問題、問題背景、日中活動、興味関心、家族関係、交友関係などを自由に話すことができた。コンサルタントはクライアントの学校復帰や教育機会保障のために、何を優先して解決する必要があるかを見極めながら傾聴するよう依頼された。そして、解決すべき問題の形成要因や維持要因について応用行動分析の枠組みを用いて整理するための質問や意見を自由に述べることもできた。非言語行動に関する指定は、一切行わなかった。なお、面接の実施順序はコンサルタント間でカウンターバランスし、コンサルティは同じ情報を2名のコンサルタントに提供した。なお、分析対象は1回目 (初見) であった。

**指標と分析** コンサルタントとコンサルティの非言語行動を、5秒を1区間とするインタバル記録法により観察した。非言語行動の具体的な反応型は先行研究に倣い、「注視 (eye gazing)」「頷き (nodding)」「微笑 (smiling)」とした。そして、コンサルタントがコンサルティに及ぼす影響を分析するため、lag-sequential analysis (Borrero & Borrero, 2008) を用いた。その意図は、標的行動の条件確率と期待値の間に、どれくらいの乖離があるか検討することであった。

**倫理配慮** 本研究の実施にあたり、立教大学心理学研究倫理委員会の承認 (14-01) を受けた。参加者に対して事前に研究の意義と手続きを口頭で説明し、書面にて同意を得た。

## 結果

観察者間一致率の平均値は96.9 (93.5~99.3)%であった。

本研究では、コンサルタントがコンサルティに及ぼす影響を検討

した。コンサルタントの非言語行動を独立変数とし、コンサルティの非言語行動を従属変数と見なした。

注視 (CTA-1: 87.5%, CTA-2: 82.5%) および微笑 (CTA-1: 11.7%, CTA-2: 11.9%) には差異がなく、頷き (CTA-1: 54.2%, CTA-2: 24.7%) に差異があった。表1に、CTAの頷きがCTEの非言語行動に及ぼす影響に関するlag-sequential analysisの結果を示した。なお、CTEの注視の生起率は天井効果を示したため、分析の対象から除外した。

表1 lag-sequential analysisの結果

	CTE	頷き	微笑
CTA-1	頷き	4.14*	-0.45
CTA-2	頷き	-2.36*	0.69

\* p<.05

Z得点が+1.96以上のとき後続の行動は有意に生じやすく、-1.96以下のとき有意に生じにくい。CTA-1の頷きはCTEの頷きを誘発し、CTA-2の頷きはCTEの頷きの生起を抑制していた。また、CTEの微笑に及ぼす影響は検出されなかった。

コンサルタントの非言語行動は、コンサルティの非言語行動に影響を及ぼしていた。とくに、頷きの影響力が顕著で、CTA-1とCTA-2の相違が明確であった。

## 考察

本研究の結果は、Montague, et al. (2011) の知見を支持するものであった。すなわち、医療診察場面における医師の非言語行動と類似の影響力が学校におけるコンサルタントの非言語行動についても見られるということである。今後事例を重ね、様々な条件下で本研究の結果が再現されるかを確認しなければならない。けれども、問題解決に高い効果性を有する行動コンサルテーションの担い手は、自分自身の非言語行動の影響力に注意深くならなくてはならないであろう。

## 文献

- Borrero, C. S. W., & Borrero, J. C. (2008). Descriptive and experimental analyses of potential precursors to problem behavior. *Journal of Applied Behavior Analysis*, *41*, 83-96.
- Dinkmeyer, D. Jr., Carlson, J., & Michel, R. E. (2016). *Consultation: Creating School-based Interventions* (4th ed.). New York: Routledge.
- Erchul, W. P., & Martens, B. K. (2002). *School Consultation: Conceptual and Empirical Bases of Practice* (2nd ed.). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Montague, E., Xu, J., Chen, P., Asan, O., Barrett, B. P., & Chewing, B. (2011). Modeling eye gaze patterns in clinician-patient interaction with lag sequential analysis. *Human Factors*, *53*, 502-516.

## 付記

本研究の実施にあたり科学研究費助成事業・基盤研究C (課題番号: 15K04253) の助成を受けた。

(OISHI Kouji)